

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

ベートーヴェンの《第九》と「人類愛」？

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡辺, 裕, Watanabe, Hiroshi メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1430

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



エッセイ

ベートーヴェンの《第九》と「人類愛」？

渡辺 裕

新型コロナウイルス問題がいよいよのっぴきならないことになってきている。事態が長引き、深刻化するなかで、これまで何となく曖昧にすませてきた矛盾や問題点が白日のもとにさらされ、われわれの前に否応なしに突きつけられているように感じられることも少なくない。

ウィルスの広がりを防ぐために、出入国管理がこの上なく厳格になって国家間の人の移動が事実上ストップしてしまったり、県境をまたいだ移動の「自粛」を厳しく求められたりといった事態が頻発し、国や地方自治体の存在感が限りなく高まっているように思われる状況に直面してみると、IT化と手をたずさえて進行しているかのように思われていた「ボーダーレス化」の帰趨はいったいどうなるのだろうか、と思わず考えさせられてしまう。「国家」などというものは一九世紀の遺物で、その使命を終えつつあるなどという単純な話ではないし、「ボーダーレス化」も、あたかも近未来社会の象徴であるかのように語られるべき話では全くないのである。

そんな折、たまたま今年の授業で共通テーマとしてベートーヴェンの《第九交響曲》を取り上げたのがきっかけで、《Following the Ninth》という映画をみた。二〇一三年にアメリカで公開されたドキュメンタリー映画（ケリー・カンダーレ監督）で、《第九》の「喜びの歌」の合唱が、世界各地で自由を求める人々の様々な運動の局面で歌われ、その力となってきた経緯を描き出している映画なのだが、これを見てまたいろいろなことを考えさせられてしまった。

《第九》第四楽章の「喜びの歌」は言うまでもなく、シラーの原詩によるものだが、歌詞中の「すべての人は兄弟となる（Alle Menschen werden Brüder）」というくだりに代表されるように、普遍的な人間愛の力によって人々が分断をこえてひとつに結び合わされることをたたえる内容として理解されてきた。それゆえに、交響曲としてコンサートのプログラムにのせられる以上に、祝祭的な場など、様々な特別な場で歌われてきた。さすがにもうだいぶ前のことになってしまったが、一九九八年に長野で開かれた冬季オリンピックの開会式でも、小澤征爾の指揮のもと、世界の五大陸からの歌声を一つに結び合わせる形で

歌われたことを印象深く記憶されている方も多いただろう。

この映画で取り上げられているのは、主にドイツ、チリ、中国、日本の各国の事例である。ドイツは「壁の崩壊」で東西両ドイツが分断から統一へと向かった時の話が、当時旧東ベルリンで暮らす学生だった若い女性の視点から語られる。ベルリンの壁が崩壊した一九八九年の十二月二五日に、レナード・バーンスタイン指揮のもと、東西ドイツを中心にその他の国からも有志のメンバーが加わり、臨時編成されたオーケストラの手で《第九》が演奏された。東西統合の記念碑的存在として今でも DVD で見ることができ、その際に歌詞の「喜び (Freude)」という語が「自由 (Freiheit)」に置き換えて歌われたこともよく知られているが、そのことがこの旧東地区出身の女性にはどのような意味をもって体験されたかが、この映画からは伝わってくる。

それに対してチリと中国の事例はデモなどの政治的な活動で《第九》が使われたもので、その際の当事者たちの証言がおさめられている。チリの方は、一九七三年のクーデターで成立したピノチェト軍事独裁政権の弾圧で根こそぎ不当逮捕された反対派の政治活動家の釈放を求めて、その妻など、女性たちを中心としたデモが行われた際に歌われた。逮捕者が勾留されている建物を取り囲んでの歌声が、囚われていた人々をいかに勇気づけたかといったことが、当事者たちの証言によって語られる。

他方、中国の方は一九八九年の天安門事件の際に広場でハンストを行っていた学生たちの話で、大音響で鳴り響く軍の退去通告の放送などに対抗し、手作りのスピーカーで《第九》を流して応戦した顛末を、今はアメリカに暮らす当時のリーダーのひとりが淡々と語る。いずれも感動的な証言だ。

これに対して日本については、年末に《第九》を歌うために多くのアマチュア合唱団が組織され、熱心に練習に励むさまを紹介するのが中心である。政治がらみの他の諸国の動きとはいささか異質にもみえるが、東日本大震災後に人々がひとつになって復興にあたる中で《第九》の演奏会が企画された事例なども取り上げられている。

これらの様々な事例を通してこの映画が描き出そうとしたのは、《第九》という曲のもつ、世界の様々な地域や文化に属する人々をひとつに連帯させることのできる力である。そこに含まれる「人間愛」という射程の大ききゆえに、単に政治活動に関わる音楽以上のものになっているという側面が強調されている。インタビューに答えた天安門事件の際のかつての学生リーダーは、当時そこに集まっている学生たちが共通に求めていたのが、人間としての尊厳を取り戻すことであった、と語っている。また、日本の「年末の第九」のよう

な、いささか異質にもみえかねない、政治がらみではない事例があえて一緒に取り上げられていることもまた、そのような制作者の意図ゆえのことかもしれない。

もとより、この《第九》という曲がそのような形で一定の力を行使してきたことはたしかであるし、多くの人々に勇気や感動を与える形で歴史を刻んできたことも間違いない。しかしながら、そのようなハッピーな事態ばかりではない。ヒトラーがナチのプロパガンダに利用したことでよく知られている一九三六年のベルリン五輪では、開会式の日の夜に若者たちの舞踊による特別イベントが開催され、その結びには《第九》の最終楽章が使われている。日本でもまた、第二次大戦末期の一九四四年八月に東京帝国大学で行われた「出陣学徒壮行大音楽会」で、尾高尚忠の指揮する日響（現在のN響）によって演奏されたのは、やはり《第九》だった。第九の刻んできたこのような「黒歴史」的な事態もまた、集めてみれば結構の数におよぶのではないだろうか。これらはともすると、例外的に生じた「悪しき政治利用」であるかのように片付けられがちだが、こういう特殊な事例を周到に排除すればあとは万々歳というようなわけにはなかなかいかない。障壁をこえて人々を結びつける人間愛的な力と、戦争へと人々を鼓舞するデモーニッシュな力は、もしかしたら、ほとんど同じことの裏返しにすぎないのかもしれないのである。

それだけではない。人々を結びつけた同じ《第九》が、返す刀で分断を引き起こすことに一役買ってしまいそうな事態もある。《第九》はいま、《欧州讃歌》として、欧州連合（EU）で国歌代わりに演奏される曲になっており、国家の枠をこえた欧州の統合の象徴として機能している。このような使い方をされやすいのも《第九》の特徴で、東西ドイツが分断されていた時期、一九六〇年のローマ五輪、六四年の東京五輪では、両国は東西合同の「統一ドイツ」チームとして出場し、その際に国歌代わりに使われたのも《第九》だった。もちろん、国家の狭い枠組みをこえて人々を結びつける人間愛的な力の証であることに間違いはないが、その時に忘れてならないのは、こうした結びつきから排除されたり疎外されたりすることになる人々の存在である。

かつてアフリカにローデシアという国があった。一九八〇年にジンバブエ共和国として独立して現在にいたるが、それ以前には南アフリカ共和国同様、白人政権が支配する、まぎれもないアパルトヘイト体制の国だった。そのローデシアで一九七四年から一九八〇年まで歌われていた国歌がまさに《第九》の旋律によるものだったが、このことは白人の連帯をもたらす歌が同時にそれ以外の人々の排除、疎外を意味する歌でもあるということを示している。そういう意味では《欧州讃歌》も潜在的には、西洋中心主義者が

非西洋人を排除する歌でありうるし、「統一ドイツ」の歌も、汎ゲルマン主義者がそれ以外の民族を排除する歌でありうる。音楽というメディアが、言語のように事象を概念化して特定することを不得意とするということも手伝って、「人類愛」などという言葉が独り歩きする背後で、一つの曲が差別と分断の装置として融通無碍に機能するようなことが容易に起こりうるのである。

国境線など存在しないはずのウィルスのために国境や県境の存在が急速に際立ってきているという逆説的な状況をみるにつけ、《第九》という作品が二〇〇年にわたって刻んできたさまざまな受容の歴史が思い出される。もちろん、「頭の中がお花畑」と言われようと、何があろうと、「人類愛」へのこだわりを持ち続けることは、それはそれで大切なことだが、一つの言葉にスポットライトが当てられている、その裏側にいるかもしれない、差別されたり阻害されたりしている人々から見える景色は全く別物かもしれないと考えるような想像力が、今のわれわれには必要なのではないだろうか。今も巷に溢れている「音楽のもつ癒やしの力」といった言葉を耳にすると、ふとそんなことが頭をよぎるのである。

(『アステイオン』第93号 [サントリー文化財団編]、2020.11 所収)